大人も正しくがんを知っているでしょうか

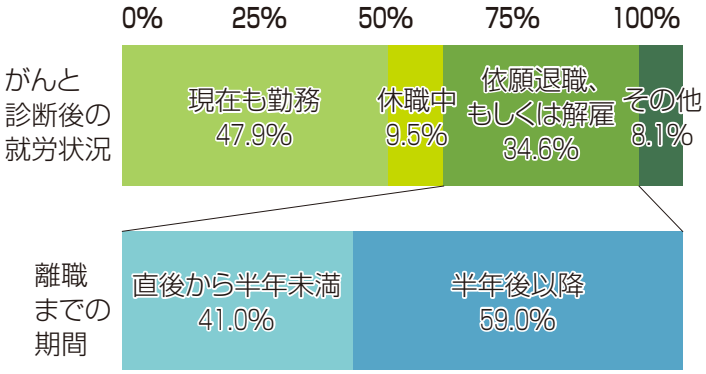
がんと診断されて40%近くの人が仕事を辞めたり、解雇され、さらにそのうちの半数近くの人が、がんと診断された時にすぐに仕事を辞めてしまうという報告があります。これも、がんに対する正しい理解がないからではないでしょうか。がんが長く付き合う病気へと変わった今は、がんの治療にかかる費用や、治療が終わった後の生活のことも考えなければなりません。また、仕事を続けるためには、職場の人たちの理解も必要です。自分ががんになった時に、職場の人ががんになった時に、理解して助け合うことが必要ですが、残念なことに現状ではがん患者に対する理解も社会の仕組みも全く足りていません。これは、がんという病気についての正しい知識を得たり、考えたり、話し合ったりする機会が今までになかったからではないでしょうか。

だからこそ、小さいころからの「がん教育」

だからこそ、小さいころから「がん教育」を通し、がんに対して正しい理解ができれば、子どものころから生活習慣に気をつけたり、大人になった時に検診を受けるなど、自分の体を大切にしようと思うでしょう。また、身近な人や大切な人ががんになった時の事を考える機会にもなります。家族、友だち、知人、あるいは自分が…、「がん」と関わりのない人はほとんどいないのではないでしょうか。そうした身近な人ががんになった時に、心身ともに強いダメージを受けるのは子どもたちではないでしょうか。生活習慣をよくしたら、検診で早期発見して早期治療できることだけが、人生の正解ではありません。がんになったから、その人の人生が間違いであったわけでも、失敗であったわけでもありません。がんになっても希望を持って自分らしく生きるという気持ち、それを周りの人が理解して寄り添うことの大切さ、その時に自分が何をすれば良いのか、何ができるのかを、「がん教育」という仮想の体験から学んでほしいのです。それは、優しさや思いやり、そして命の大切さを学ぶことにもつながります。

がんと診断後の就労状況の変化

(出典:2013年がんと向き合った4,054人の声)
「がん体験者の悩みや負担等に関する実態調査　報告書」



市内中学校で「がん教育」の話をする
市内病院緩和ケア内科　髙木健司(たかぎけんじ)医師

「がん教育」の問題点

「がん教育」で一番問題にされている点は、子どもたちへの配慮です。子ども自身ががん経験者であったり、ご両親や祖父母などががんの治療中であったり、最近身近な方をがんで亡くしたりしている子どもや保護者がそこにいる可能性は高いです(と言うより、いて当たり前です)。学校の先生方も前もって情報を確認したり、私たち講師も話す時に十分な配慮は行っています(いるつもりです)。しかし、何度も書きますが、がんがいつどこで出会ってもおかしくない当たり前の病気であるならば、がんを無闇に怖がったり、がんに対する誤解や偏見をなくすためにも、子どもたちへの「がん教育」は大切だと思います。

子どもから大人へ

子どもたちは素直であり、私たちが思っているより大人です。人の話には耳を傾けます。授業後の感想でもがんに対する不安な気持ちが変わったと言ってくれます。そして、きっとそこから、さらに自分で考え、判断し、行動し、その先の人生につなげていく力があると思います。「がん教育」を受けて帰宅された時には、何を学び、何を思ったかをご家庭でも話し合ってください。それを聞くことが、ご家族の方の意識の変化にもつながることになると思います。

おわりに「願い…未来のために」

子どもたちが自信を持って生きていけるように、どんなに変化して予測困難なことが未来に起こった時にも、1人ひとりが考え、判断し、行動することで、幸せな未来を共につくっていけるように、いま学んでいるのだと思います。そんな未来であることを切に願います。

問合　市民病院経営企画課経営企画G　☎28-5151　内線2281